

## 地域社会とは、場所ではなく、人との係わり

学校の休日や長期休暇の時に、障害児の学童保育活動に取り組んでいるメル友たちがいる。

学童保育活動の空白地域があり、地域の親たちの要望が行政に寄せられていることから行政からの声かけがあり、その地域に常時の学童保育活動の準備を進めているよう。

借家も見つかり改装にも手をつけたようだが、そこで持ち上がったのが、町内の役職にある方の「同じ地域に障害児関係施設は、2つは要らない」との行政への申し入れで、足踏み状態とか。確かにその地域には障害児の通園施設が既にあるようだが、主旨、対象児の異なるもの。

その方の理解のなさと思われるが、行政の立場では地域の理解が得られない現状では、メル友たちにしばらくはゴーサインを出せないよう。行政の補助（例えば、家賃等）なくしては経済的負担は大変がけに、行政の OK がないと踏み出せないよう。

この話を聞いて、つい思った。親たちの具体的に行動する姿が見えてこない。

行政もその方とは話し合っているようだが、利用予定の家族共々、その方に理解を求める動きをしてみても、とメル友たちにはアドバイスはしたが、行政リードの動きなだけに、一々行政と相談しなくてはならないよう。

親たちが、「他の地域にあって、この地域にないから」と行政に要望するのは、至極当然な成り行きとは思ふ。しかし、「地域に顔を見せる」日頃の生活はどうなっているのか、と問うてみたくもなる。

北欧のある福祉先進国にさえ、「見えないことは分からない」の言葉があるとか。やはり障害のある子どもを育てる親の日常の「地域で暮らす」という言葉の中身のとらえ方、行動如何が、こうした折に、ハードルとして出てくるような気がする。

こうした話に接すると、以前に紹介した明石さん（「雑学 BN」書籍等読後感関係（I）P、2004. 9.29.「親としての環境作りへの実践・行動力」：参照）の「地域とは、場所ではなく、人との係わり」と思い、手作りの通信を地域の方々の顔を見て会話しながら渡す「手配り」をしてきた親としての行動力は、やはり凄い！の一言。

メル友たちには、既に明石さんの本を紹介し、TV番組のビデオも貸してある。

メル友たちも、まずは親たちにしなくてはならないことはあるような気がするのだが…。

折角のメル友たちのやる気が衰えないように、時折話の聞き役しか、自分にはできないのが……。